曹魏洛陽の宮城をめぐる近年の議論

向井佑介

はじめに

洛陽は唐代以前の中国においてもっとも重要な都市のひとつであった。現在の河南省洛陽の市街地は、かつての東周王城と隋唐洛陽城の上層に形成されており、その東郊に後漢①・曹魏・西晋・北魏の諸王朝が都とした漢魏洛陽城の遺跡がある。現在のこる漢魏洛陽城の城壁は、およそ南北三八〇〇×東西二六〇〇メートル、洛河の河道が変動したことで南の城壁は壊滅したが、東・西・北の城壁はなお地上に断続して痕跡をとどめている（図3）。これが北魏の内城にあたり、さらに外側を大きく外郭城がかこんでいた。現在までの考古学的調査と文献の考証によって、北魏洛陽城の構造はかなり具体的に把握できるようになってきた。しかし、それよりふるい漢魏晋の洛陽城については必ずしも統一的理解がえられておらず、その復元をめぐって議論がつづいている。

北魏の洛陽城は、内城の北部やや西よりの位置に宮城を置く。宮城の中枢には、正殿である太極殿をはじめ多くの殿舎がならび、その南面に宮城正門である閶闔門の巨大な双闕があった。閶闔門から宮城の正面に出ると、銅駝街とよばれる大路がまっすぐのびて、宣陽門をこえて南へとつづいている。宮城の北には華林園とよばれる園林がつくられ、南は銅駝街をはさんで役所がならび、周囲には永寧寺をはじめとする仏教寺院もあった。北魏洛陽城をとりまく外郭城の内側には、三二〇ないし三二三坊が整備され、貴族や官吏の邸宅のほか、寺院や市などが分布していた。

都城北部に宮城をかまえ、宮城の正門から南北方向の大路がまっすぐのびて、その東西に街区が整然とならぶ北魏洛陽城の構造が、のちの隋大興城や唐長安城の祖型となり②、さらに日本の平城京をはじめ東アジア各地の都城にも継承されたことは、あらためて説明するまでもない。しかし、こうした都城プランの基本形が

洛陽においていつ成立したのか、なお明確ではない。後漢代には北宮と南宮の二宮があり、曹魏や西晋はそれを踏襲したとするのがかつての通説であった。後述するように、魏晋の洛陽に南宮と北宮があったことは文献の記載から確かめられ、それらが後漢の南北宮の場所にそのまま建設されたのであれば、魏晋の洛陽にもふたつの宮城があったことになる。しかし近年では、考古学の調査成果と文献史料の再検討にもとづき、曹魏洛陽城の南宮と北宮はともに後漢北宮の場所にあったとする説が支持をえている。その説にしたがえば、宮城の配置に代表される北魏洛陽城の基本構造は、曹魏の時代におおむね完成していたことになる。

曹魏明帝が洛陽に建設した太極殿は、南北朝から唐代にかけて都城のもっとも重要な宮殿をさす名称として定着し、日本の古代都城でもこれにもとづき大極殿の呼称が用いられた。少なくとも宮殿の名称という点で、曹魏代にひとつの変革があったことはまちがいない。曹魏明帝の太極殿が後漢南宮の跡地にあったとする説によれば、曹魏は太極殿という概念を創出しながら都城プランにおいては旧来の伝統を踏襲したことになる。一方、その太極殿が後漢北宮の故地に造営されたとする論者の多くは、曹魏代の変革は宮殿の名称にとどまらず都城全体の構想におよんだもので、曹魏が創出した都城プランが後代に多大な影響をあたえたと考えている。つまり、曹魏洛陽の宮城をいかに復元するかは、中国のみならず、東アジア都城史上における洛陽の位置づけを左右する重大な問題といえよう。

本稿では、曹魏洛陽宮城の構造をあつかった現在までの主要な研究を整理し、文献史料の記載と考古学の調査成果をもとに、それぞれの復元案の妥当性と問題点を検証する。そして、曹魏洛陽宮城の復元についての私見を述べるとともに、中国の都城史における洛陽の位置づけについて展望を述べることにしたい。

① 後漢の洛陽は「雒陽」と表記されることが多いが、本稿では文献史料から引用する場合をのぞき、原則として「洛陽」に統一する。

② 北魏洛陽城の制度が東魏・北斉鄴城をへて隋大興城・唐長安城に継承されたとする見解は、那波利貞〔一九三一〕の「支那首都計画史上より考察したる唐の長安城」がはやく、陳寅恪〔一九四六〕が『隋唐制度淵源略論稿』にしめした見解もこれにちかい。厳密にいえば、北魏洛陽城の宮城は、都城北辺に接してはおらず、中軸線もやや西にずれているため、隋大興城・唐長安城の宮城とは異なる。また、南北朝時代には隋唐代のように国の役所が集中する皇城がなく、北魏の洛陽城では内城の銅駝街周辺に役所が集中する一方で、貴族の邸宅や仏教寺院なども混在していた。したがって、隋唐の都城が出現するにあたり南北朝の都城からいくぶんの飛躍があったことは事実であるとはいえ、前者が後者を基礎にして成立したことはまちがいない。

一　洛陽の南宮と北宮

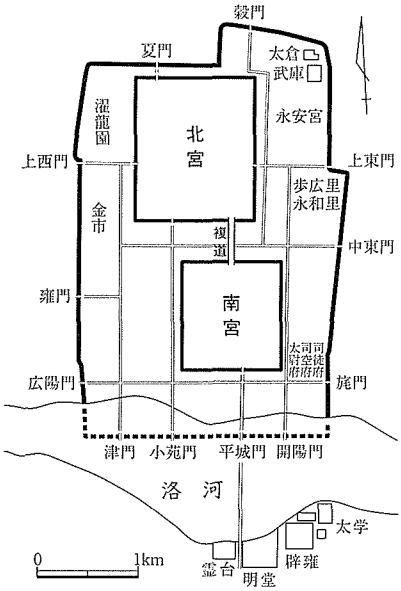
洛陽には後漢以前から南宮と北宮があった。『輿地志』によると、秦のときすでに南北宮があったという。[1] その当否はさだかではないものの、少なくとも南宮は前漢初期にさかのぼり、北宮も後漢光武帝即位の前年には存在していた。[2] 洛陽を都とした光武帝は南宮の却非殿を中心的な宮殿として使用したが、それは充分な規模と格式を備えたものではなかったらしく、建武一四年（三八）に南宮前殿を建設し、これを南宮の正殿とした。[3] 光武帝が一貫して南宮を重視したのに対し、後漢の明帝は永平三年（六〇）に北宮の大改修に着手し、およそ五年をかけて北宮を完成させた。[4] 明帝の造営した北宮には、正殿として徳陽殿が建てられ、また宮の正門として朱雀門（朱雀闕）が築かれた。

後漢洛陽城の構造にかんする先行研究は、村元健一〔二〇一〇〕や外村中〔二〇一〇〕によってまとめられ、諸説の問題点が明らかにされている。現在ほぼ通説となっているのは、考古学の調査成果をふまえた王仲殊〔一九八二〕の復元案（図1―1）と、その問題点を改訂した銭国祥〔二〇〇二・二〇〇三〕の新しい復元案（図1―2）で、北宮は北魏の宮城の位置にあってひとまわり大きく、南宮はその東南に主軸をずらして配置されている。

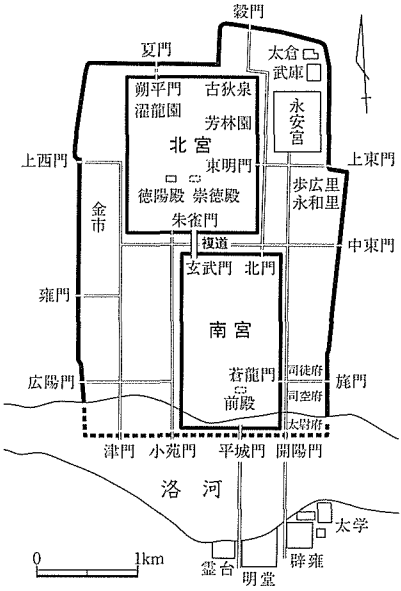
それに対し、かつて馬先醒〔一九八〇〕は『後漢書』李賢注に引く蔡質『漢典職儀』にみえる「両宮相去七里」の記載を根拠として、洛陽城内の南端と北端にそれぞれ南宮と北宮を配置する案[5]を提示していた（図1―3）。この復元案は、北魏の宮城南壁の下層に後漢の宮城壁があるという近年の発掘成果〔中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊二〇〇三〕と矛盾し、文献史料の記載とも整合しないため支持することはできない。

そのほか、大城内の中央北部に、南宮と北宮が南北につらなって存在したとする張鳴華〔二〇〇四〕の復元案がある（図一―四）。これは、清の楊守敬『水経注疏』および『水経注図』の説にちかい。しかし、文献の記載[6]によれば、後漢南宮の宮門は都城南面の平城門のすぐ内側にあって、平城門は南宮の宮門と位置づけられていた。つまり、後漢の南宮は都城南壁のすぐ内側にあったと考えるのが妥当であるため、この復元案にはしたがえない。

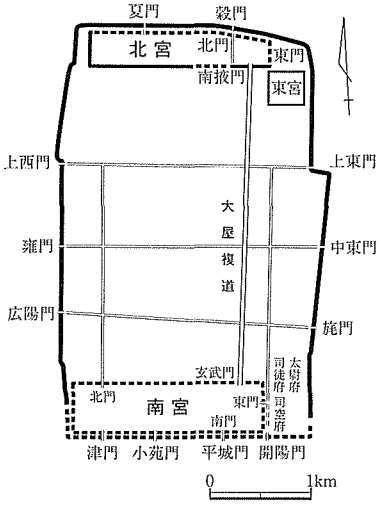
そうすると、現在までの考古学の調査成果や文献史料の記載と矛盾する部分がもっとも少ないのは銭国祥らの説であり、近年の研究においても、この復元案を基礎として議論が進められている〔村元二〇一〇、渡邉二〇一〇など〕。本稿でも、後漢の洛陽城については、おおむね銭国祥の復元案にしたがって議論を進めることにしたい。



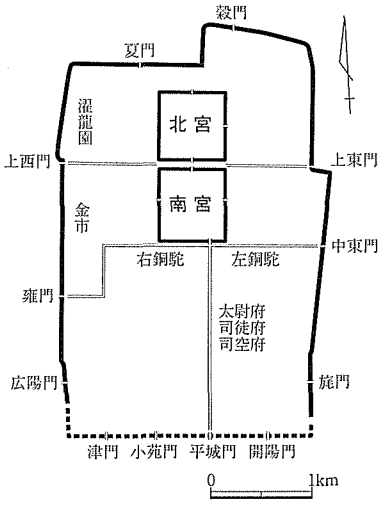
1. 王仲殊による復元



2. 銭国祥による復元



3. 馬先醒による復元



4. 張鳴華による復元

図1　後漢洛陽城の復元案

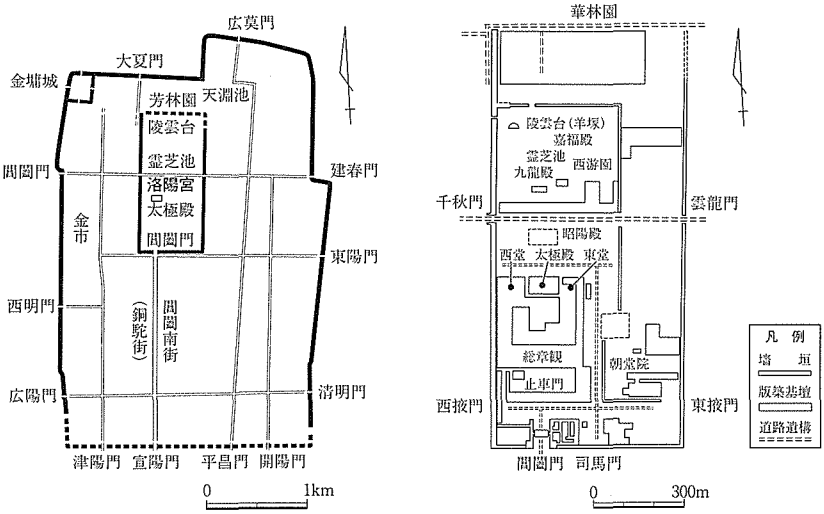


図２　銭国祥による魏晋洛陽城（左）と魏晋・北魏洛陽宮城（右）の復元

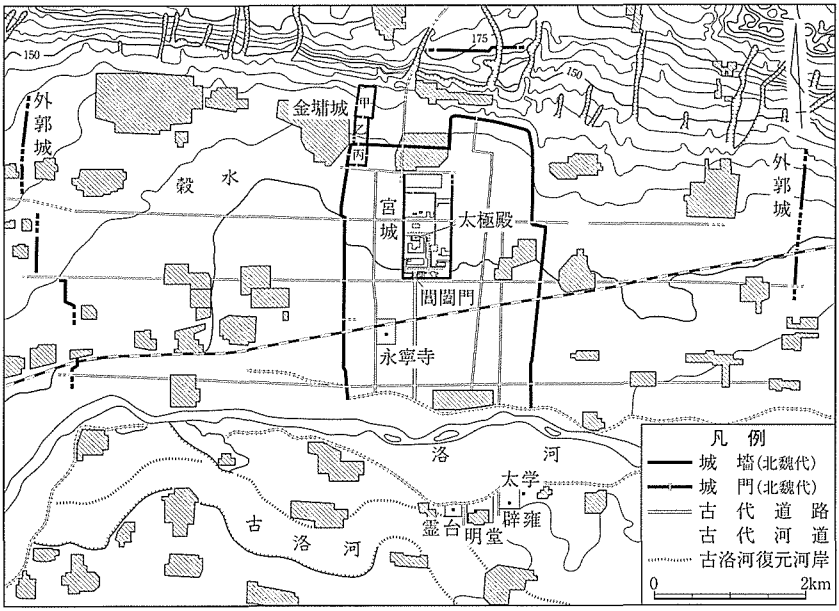


図３　北魏洛陽城平面図

（1） 後漢の崇徳殿と曹魏の太極殿

曹魏洛陽宮城の復元に際して大きな争点となっているのは、明帝が建設した太極殿が、後漢の南宮と北宮いずれの場所にあったのか、という問題である。『魏志』明帝紀によれば、明帝は青龍三年（二三五）に洛陽宮の大規模な造営事業を開始し、太極殿と昭陽殿を建設し、総章観を築いた。⑦それより先、曹操は後漢末の戦乱で荒廃した洛陽を再建しようとして建始殿の造営に着手しながらほどなくして世を去り、⑧黄初元年（二二〇）に文帝曹丕が洛陽宮の造営を開始した。『魏志』文帝紀にみえる洛陽宮造営の記事について劉宋の裴松之注は次のようにいう。

臣（裴）松之案ずるに、諸書に記す、是の時（文）帝は北宮に居り、建始殿を以て群臣と朝し、門は承明と曰う。……明帝の時に至り、始めて漢南宮の崇徳殿の處に於いて太極・昭陽諸殿を起つ。⑨

このように裴松之は、諸書の記載をもとに、曹魏明帝の建設した太極殿が「漢南宮崇徳殿處」にあったことを明言する。このことを、北魏の酈道元『水経注』穀水注は次のように記す。

魏の明帝、上は太極に法り、洛陽の南宮において、太極殿を漢崇徳殿の故處に起て、雉門を改め閶闔門と為す。⑩

曹魏明帝は「洛陽南宮」において太極殿を「漢崇徳殿之故處」に建造したのだという。かつては多くの研究者がこれらの記述にしたがって、曹魏太極殿は後漢南宮の場所にあったと理解し、また曹魏は後漢の南宮と北宮をそのまま踏襲したと考えてきた〔王仲殊一九八二、楊寛一九八七、吉田二〇〇〇など〕。

それに対し、郭湖生〔一九九一〕は、『晋書』『宋書』などにみえる晋の洛陽についての記述をもとに、西晋の南宮と後漢の南宮とは異なる場所にあったとする説を提起した。西晋洛陽城では南宮と北宮とが南北につらなって、ともに北魏の宮城の位置にあったと考えるのである。そして、そうした西晋洛陽城の構造が、曹魏の時代にさかのぼる可能性を指摘した。この説にしたがえば、曹魏の太極殿は後漢北宮の場所にあったことになる。

裴松之注が曹魏明帝の太極殿は「漢南宮崇徳殿處」にあったというのに対し、崇徳殿は漢の北宮にあったという史料も存在する。張衡「東京賦」（『文選』巻三）によれば顕宗（明帝）のときにおよんで「乃ち崇徳を新たにし、遂に徳陽を作る」といい、薛綜注に「崇徳は東に在り、徳陽は西に在り、相去ること五十歩」というから、⑪後漢明帝は崇徳殿を重建するとともに徳陽殿を造営し、両者は東西にならんでいたことが知られる。徳陽殿が北宮にあったことに異論はないから、⑫崇徳殿も同じく北宮にあった可能性が

ある。銭国祥〔二〇〇三〕は、崇徳殿は徳陽殿の東にあって、徳陽殿より先に北宮の主殿として建設されていたと理解する。

しかし、外村中〔二〇一〇〕が注意するように、崇徳殿が西に、徳陽殿が東にあったという史料もある。後漢北宮にあったらしい崇賢門と金商門について、先の「東京賦」（『文選』巻三）薛綜注は、「崇賢は東門の名なり、金商は西門の名なり」といい、『漢官儀』によれば東の崇賢門の内に徳陽殿があり、『後漢書』蔡邕列伝によれば西の金商門が崇徳殿にいたる門であったことが知られる。[13] これだけの史料で崇徳殿と徳陽殿の位置関係を確定することはできないものの、両者がならんで北宮にあった可能性はたかい。したがって、その跡地に建てられたという曹魏の太極殿も、やはり後漢の北宮の地にあったと推定される。

(2) 後漢の徳陽殿と曹魏の太極殿

『魏志』文帝紀の裴松之注や『水経注』穀水注が、曹魏明帝の太極殿は漢の崇徳殿の故處に造営されたというのに対して、崇徳殿ではなく徳陽殿の場所に太極殿が建てられたという説がある。曹植「毀鄄城故殿令」（『文館詞林』巻六九五）には「故に朱雀を夷らげ閭闔を樹て、徳陽を平らげ泰極を建つ」[14]とあり、これは北宮の正門であった朱雀門を解体して閭闔門をつくり、またその中心的宮殿であった徳陽殿を壊して太極殿を建てたことをしめしている。これをもとに渡辺信一郎〔二〇〇〇〕は、明帝が後漢北宮の徳陽殿の故處に太極殿を造営し、また朱雀門の跡地に閭闔門を建設したと理解した。銭国祥〔二〇〇二・二〇〇三〕も、曹魏の太極殿が徳陽殿のまさにその場所にあったのか、その附近の別の場所にあったのかは明確でないとしながらも、太極殿が漢の北宮にあったことをしめす傍証として曹植の文章を用いている。筆者も前稿ではこれらの説にしたがった〔向井二〇一〇〕。

もっとも、曹植が鄄城に封ぜられたのは黄初三年（二二二）で、彼は太和六年（二三二）に没しているから、明帝が青龍三年（二三五）に着手した太極殿の建設を実際に目にしてこの文を作成したわけではない。安田二郎〔二〇〇六〕は、建立すべき宮殿・門闕の名称と配置にかんする洛陽宮の全体的プランが、文帝の黄初年間にはすでに策定されていたことをしめすものと理解する。それに対し、佐川英治〔二〇一〇〕は曹植の令にいう「閭闔」と「泰極」とは、固有名詞としての閭闔門と太極殿をさすのではなく、文帝のときに正殿として重視されていた建始殿と承明門とを象徴的に呼んだにすぎず、この文章は太極殿が漢の北宮にあったとする根拠にはなりえないと主張した。

しかし、明帝が本格的に宮室修治に着手する青龍三年以前から

おおよその設計プランがあった可能性はある。『魏志』王朗伝によると、太和元年（二二七）に王朗は明帝を諫めて、

今まさに建始の前は用て朝会を列するに足り、崇華の後は用て内官を序するに足り、華林・天淵は用て游宴を展ぶるに足る。もし先ず閶闔の象魏を成して用て遠人の朝貢せる者を列するに足らしめ、城池を脩めて用て踰越を絶ち国険を成すに足らしめば、其の余は一切、且に豊年を須つべし。[15]

と進言している。このとき、先の文帝の時代すでに完成していた建始殿が洛陽宮の正殿として機能しており、また後宮には崇華殿があり、華林園（芳林園）と天淵池が造営されていた。さらに朝貢の使節をむかえるために閶闔門の闕を完成させ、あわせて国都をまもる城壁と濠をめぐらすことが急務とされた。王朗のことばから、明帝が即位してまもなく閶闔門の造営事業に着手していたことがうかがえる。

曹植の令にいう「閶闔」と「泰極」が建始殿と承明門をさすとする説には賛同できないものの、それらが明帝の造営した閶闔門と太極殿そのものとは限らないという佐川〔二〇一〇〕の指摘はもっともである。後述するように、発掘調査の結果、北魏の閶闔門の下層からは魏晋の閶闔門とおぼしき門闕の基壇が検出されているにもかかわらず、その門闕は後漢代にはさかのぼらず、曹魏のとき新たにひらかれた門であることが判明したからである。曹魏の閶闔門は、後漢の朱雀門のまさにその地に造営されたのではなかった可能性がたかい。それはまた、曹魏の太極殿が後漢の徳陽殿とまったく同じ場所にあったとは断定できないことをも意味している。この曹植の文章の解釈については、考古学の調査成果の検討とあわせて、後段で提示することにしたい。

（3）曹魏洛陽の南宮と北宮

前節までにみた史料の解釈によって、曹魏洛陽の宮城復元案は大きく二種にわかれる。第一案は、曹魏の太極殿は後漢南宮の崇徳殿の地に建設され、曹魏は後漢の南宮と北宮をそのまま踏襲したとする説である〔王仲殊一九八二、楊寛一九八七、佐川二〇一〇など〕。第二案は、曹魏の太極殿は後漢北宮の崇徳殿または徳陽殿の場所に造営され、曹魏の南宮と北宮はともに後漢北宮の地にあったとする説である〔銭国祥二〇〇二、外村二〇一〇など〕。

第一案が『魏志』の裴松之注を支持するのに対し、第二案はその注の信頼性に疑問を呈する。それは、魏晋の太極殿が「漢南宮」の地にあったと明記する史料は、裴松之注のほかに存在しないからである。『水経注』穀水注に記された「洛陽南宮」は、文脈から漢の洛陽南宮である必要はなく、「魏の明帝は、上は天の

太極をかたどり、（魏の）洛陽南宮において、太極殿を漢（北宮の）崇徳殿の故處にたて、雉門を改めて閶闔門とした」とも解釈できる。[16] つまり、裴松之の注は、諸書の記載を勘案するなかで、なんらかの誤解によって漢の南宮と曹魏の南宮とを混同した可能性がある。

それに対し、佐川〔二〇一〇〕は裴松之注の信頼性を強調する。確かに裴松之は宋をたてた劉裕の北伐にしたがって洛陽をおとずれ、旧跡をたずねてまわったことがあり、[17] 洛陽の地理と古跡に精通していた。しかし、裴松之は東晋の生まれであり、劉宋の元嘉二八年（四五一）に八〇歳で没している。彼がいかに洛陽の史跡に通じていようとも、それはあくまで晋の旧都としての洛陽を短期間のうちに探訪したにすぎず、二〇〇年も前の洛陽のすがたを正しく思いえがくことができたか疑わしい。後漢や曹魏の洛陽のようすをさぐるにあたっては、やはり書物と伝聞によるところが大きかったはずで、裴松之が後漢南宮と曹魏南宮の位置関係を誤って理解していたとしても不思議はない。

銭国祥〔二〇〇二・二〇〇三〕および外村中〔二〇一〇〕は、曹魏の南宮と北宮は、後漢の南北二宮をさすのではなく、正殿のある宮城南半を南宮と呼び、後宮としての宮城北半を北宮と呼んだのだという（図二）。北魏の宮城は中央よりやや北、宮城西壁一号門（千秋門）を東西につらぬく大路によって、南北に二分されている〔中国科学院考古研究所洛陽工作隊一九七三〕。この道路遺構（第三条横道）は、西は閶闔門、東は建春門にいたる、洛陽城内でもっとも幅のひろい大路のひとつである。南宮と北宮とを区別する境界は、この大路のあたりにあったらしい。

曹魏の明帝が南宮を造営する以前に利用されていた代表的な施設である建始殿と崇華殿とが、宮城を二分する大路より北側にあったとする外村中〔二〇一〇〕の指摘は重要である。先にみた『魏志』王朗伝が記す王朗のことばから、明帝が太極殿を建設する以前には、洛陽宮の正殿として建始殿があり、また後宮には崇華殿があったことがうかがえる。曹操は後漢の濯龍園のあたりで建始殿の造営に着手し、[18] また晋のとき建始殿の東に太倉があったといい、その太倉は北魏の建春門内御道の北、[19] つまり宮城を二分する大路より北にあった。したがって、建始殿は宮城の北半に位置していたことが知られる。一方、崇華殿は明帝のとき九龍殿と改称され、北魏の時代には宮城北半の西游園にあったことが『洛陽伽藍記』の記述によってわかるから、[20] その前身たる曹魏の崇華殿も宮城北半に所在したと推察される。

そうすると、曹操のときに起工した建始殿、文帝のときに造営された崇華殿、陵雲台、霊芝池、芳林園の天淵池・九華台などは、

いずれも北魏宮城の北半とその北方に分布していたと考えてよい。現在までの発掘調査によって、北魏の宮城南半にも魏晋の遺構があることは明らかであり、それらはやはり曹魏明帝のときに造営された「南宮」の遺構と考えるのが妥当ではないだろうか。

① 『史記』高祖本紀に「(五年五月) 高祖置酒雒陽南宮」とあり、その正義に『括地志』を引いて「南宮在雒州雒陽縣東北二十六里洛陽故城中。輿地志云、秦時已有南北宮」という。

② 南宮については前掲注①『史記』高祖本紀参照。また『史記』留侯世家に「(漢六年) 上在雒陽南宮、從復道望見諸將往往相與坐沙中語」とある。北宮については『後漢書』劉玄傳に「(更始) 二年二月、更始自洛陽而西。初發、李松奉引、馬驚奔、觸北宮鐵柱、三馬皆死」という。光武帝劉秀は翌更始三年 (二五) 六月に鄗で即位し、改元して建元元年とした。

③ 『後漢書』光武帝紀に「(建武) 十四年春正月、起南宮前殿」という。「前殿」が「正殿」そのものを指すことについては、村田治郎〔一九五一〕の考証がある。

④ 『後漢書』明帝紀「(永平三年) 是歳、起北宮及諸官府」「(永平八年) 冬十月、北宮成」。

⑤ これと類似した復元案は、Bielenstein, Hans〔一九七六〕によって提示されている。

⑥ 『續漢書』五行志一「靈帝光和元年、南宮平城門内屋、武庫屋及外東垣屋前後頓壞。蔡邕對曰、平城門、正陽之門、與宮連、郊祀法駕所由從出、門之最尊者也」によれば平城門は南宮と連なっており、また『續漢書』百官志四の注に「漢官秩曰、平城門爲宮門、不置候、置屯司馬、秩千石」と宮門のごとくあつかわれていた。

⑦ 『魏志』明帝紀「(青龍三年) 大治洛陽宮、起昭陽・太極殿、築總章觀」。

⑧ 『魏志』武帝紀に「(建安) 二十五年春正月、至洛陽。……庚子、王崩于洛陽、年六十六」といい、その裴松之注に「世語曰、太祖自漢中至洛陽、起建始殿、伐濯龍祠而樹血出。曹瞞傳曰、王使工蘇越徙美梨、掘之、根傷盡出血。越白狀、王躬自視而惡之、以爲不祥、還遂寢疾」と記される。

⑨ 『魏志』文帝紀「(黄初元年) 十二月、初營洛陽宮、戊午幸洛陽」とあり、裴松之注に「臣松之案、諸書記、是時帝居北宮、以建始殿朝羣臣、門曰承明……至明帝時、始於漢南宮崇德殿處起太極・昭陽諸殿」という。

⑩ 『水經注』穀水注「魏明帝上法太極、于洛陽南宮、起太極殿于漢崇德殿之故處、改雉門爲閶闔門」。

⑪ 張衡「東京賦」(『文選』巻三) に「逮至顯宗、六合殷昌。乃新崇德、遂作德陽」といい、注に「崇德在東、德陽在西、相去五十歩」という。

⑫ 『後漢書』靈帝紀「(中平六年) 庚午、張讓・段珪等劫少帝及陳留王幸北宮德陽殿」などから、德陽殿が北宮にあったことは明白である。

⑬ 「東京賦」(『文選』巻三) に「昭仁惠於崇賢、抗義聲於金商」といい、薛綜注に「崇賢、東門名也。金商、西門名也」という。崇賢門については『漢官儀』(『後漢書』順帝紀・李賢注引) に「崇賢門内德陽殿」とあり、金商門については『後漢書』蔡邕列傳に「詣金商門、引入崇德殿」と記される。

⑭ 曹植「毀鄴城故殿令」(『文館詞林』巻六九五) に「大魏龍興、隻人尺土、非復漢有。是以咸陽則魏之西都、伊洛爲魏之東京。故夷朱雀而樹閶闔、平德陽而建泰極」という。

⑮ 『魏志』王朗傳「今當建始之前足用列朝會、崇華之後足用序内官、華林・天淵足用展游宴、若且先成閶闔之象魏、使足用列遠人之朝貢者、

脩城池、使足用絶踰越、成國險、其餘一切、且須豐年」。

⑯ 佐川〔二〇一〇〕は『水経注』穀水注の「洛陽南宮」は漢の南宮をさすと主張する。確かに「門左即洛陽池處也、池東、舊平城門所在矣。今塞。北對洛陽南宮」とあるのは、まちがいなく漢の南宮について述べたものである。しかし、それをもって他の箇所にあらわれる「南宮」をすべて漢代のものとすることはできない。明帝が「洛陽南宮」に太極殿を建てたという問題の箇所につづいて「自董卓焚宮殿、魏太祖平荊州、漢吏部尚書安定梁孟皇、善師宜官八分體、求以贖死。太祖善其法、常仰繫帳中、愛翫之、以爲勝宜官。北宮牓題、咸是鵠筆。南宮既建、明帝令侍中京兆韋誕以古篆書之」とあるのは、やはり魏のときの北宮と南宮と理解するのが自然である。

⑰ 『魏志』少帝紀・齊王芳・景初三年二月條の注に「臣松之昔從征西至洛陽、歷觀舊物、見典論石在太學者尚存、而廟門外無之」という。

⑱ 前掲注⑧、『魏志』武帝紀・裴松之注の引く『世語』に「太祖自漢中至洛陽、起建始殿、伐濯龍祠而樹血出」という。

⑲ 『後漢書』堅鐔列傳の引く『洛陽記』に「建始殿東有太倉、倉東有武庫」という。晋の太倉については『洛陽伽藍記』巻一に「（建春門内）御道北有空地、擬作東宮、晉中朝時太倉處也」という。

⑳ 『魏志』明帝紀「（青龍三年）秋七月、洛陽崇華殿災。……丁巳、行還洛陽宮。命有司復崇華、改名九龍殿」といい、崇華殿は明帝のときに火災にあって、すぐに修復され九龍殿と改名された。九龍殿について『魏志』明帝紀・裴松之注に引く『魏略』は「通引穀水過九龍殿前、爲玉井綺欄、蟾蜍含受、神龍吐出」といい、その位置について『洛陽伽藍記』巻一は「千秋門内道北有西游園、園中有凌雲臺、即是魏文帝所築者。……臺東有宣慈觀、去地十丈。觀東有靈芝釣臺。……（釣臺）西有九龍殿、殿前九龍吐水成一海」と記している。

二　曹魏洛陽宮城をめぐる議論の展望

一九六二年に中国科学院考古研究所洛陽工作隊〔一九七三〕が漢魏洛陽城の分布調査を開始して以来、その研究は文献史学と考古学の両面から進められてきた。現在までの調査・研究成果は『漢魏洛陽故城研究』〔洛陽市文物局ほか編二〇〇〇〕と『漢魏洛陽城遺址研究』〔杜金鵬ほか主編二〇〇七〕に集成され、また『漢魏洛陽故城』〔段鵬琦二〇〇九〕としてコンパクトにまとめられているから、ここで詳しく紹介する必要はないであろう。曹魏の洛陽にかかわる重要な調査をいくつかあげると、一九九〇年代に金墉城が調査され、今世紀に入って北魏宮城の正門である閶闔門址が発掘された〔中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊一九九九・二〇〇三〕。また一九七〇年代に集中して調査された南郊礼制建築群の正式報告書が近年になって公刊された〔中国社会科学院考古研究所二〇一〇〕。さらに最近では、中国社会科学院考古研究所と日本の奈良文化財研究所〔二〇〇九・二〇一〇〕の共同調査として、閶闔門の北側に所在する宮城二号門址と三号建築址が発掘調査され、その成果がまとめられつつある。考古学的調査の進展により、曹魏洛陽城をめぐる研究はどのように変化したのか、その現状を整理し、課題と展望を述べることにしたい。

（1） 洛陽宮城の発掘調査

北魏宮城内の西よりに南北にならぶ大型建築基壇群のうち、もっとも南に位置するのが、閶闔門の遺構である。宮城の南壁が途切れ、門闕らしき土壇があるその場所は「午門台」と俗称されてきた。その構造と性格を究明するため、中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊（二〇〇三）は、一九九九年と二〇〇〇年の分布調査をへて、二〇〇一年末から翌二〇〇二年にかけてその遺構を全面的に発掘し、まさにこれが北魏の閶闔門址であることを確認したのであった。

発掘された門闕の遺構は、宮城南壁より内側（北方）に入り込んだ中央の門址と、その両端から外側（南方）につきだした東西の双闕からなり、全体として逆凹字形の平面形をなす（図4）。東西の双闕の両端はそれぞれ宮城南壁につながっている。中央の門址は、東西四四・五×南北二四・四メートル、基壇の外壁は塼でおおわれ、基壇上には桁行七間×梁行四間の門楼がそびえ、表面に漆喰を塗った版築の隔壁によって三条の門道をつくる。それぞれの門道に対応して基壇の南北に三つずつスロープがとりつく。中央の門道につらなるスロープがもっとも大きい。門の両側に築かれた双闕の基壇は、版築の基礎を塼でおおったもので、四一・五メートルをへだてて東西に対峙する。東西闕の基壇はほぼ同じ規模で、闕の本体はそれぞれ東西三六～三六・五×南北三七～三七・五メートルの方形を呈し、東闕の東側、西闕の西側は子闕を介して宮城壁と接続し、両闕の北側も同様に子闕が突出して中央の門につながる版築の壁と連接している。

門闕の基壇を部分的に断ち割って精査したところ、それらが少なくとも三時期にわたる造営・修造をへていることがわかった。周囲に堆積した遺物包含層との対応状況から、第一期は門と闕が創建された魏晋代、第二期は魏晋の基壇を再利用して門闕を再建した北魏代、第三期は北魏の門闕を補修して使用した時期でおそらく北周代と推定された。また、東闕につらなる宮城壁の基底部を断ち割って構築状況を調査した結果、もっともふるい版築層は漢代以前にさかのぼり、その上に魏晋代の版築層がかさなり、北魏以後の宮城壁はその上層にあることが判明した。これによって、魏晋および北魏の宮城壁の下層には、漢代あるいはそれ以前の城壁があったこと、魏晋代にその城壁を改修して新たに大型の門と闕を築いたこと、そして北魏代になって魏晋の基壇を利用して門闕が再建されたことが明確になった。

閶闔門につづいて二〇〇八～二〇〇九年に中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所が共同で発掘した宮城二号門址でも、

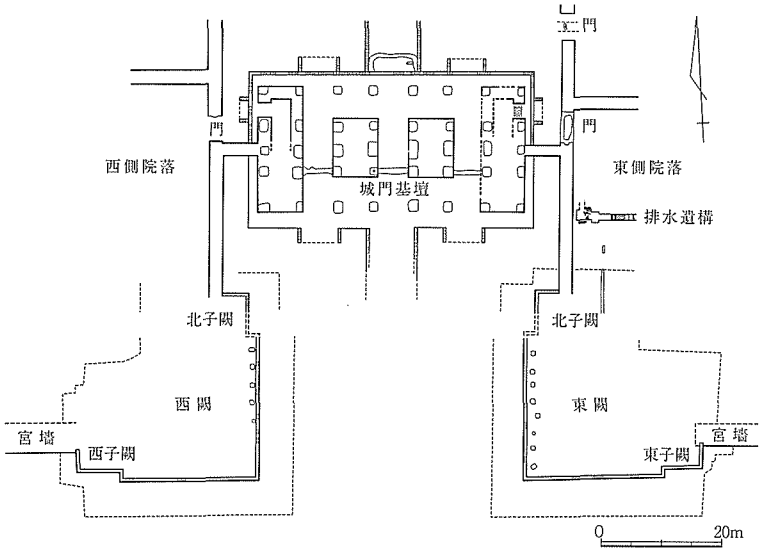


図4　洛陽宮城閶闔門址平面図

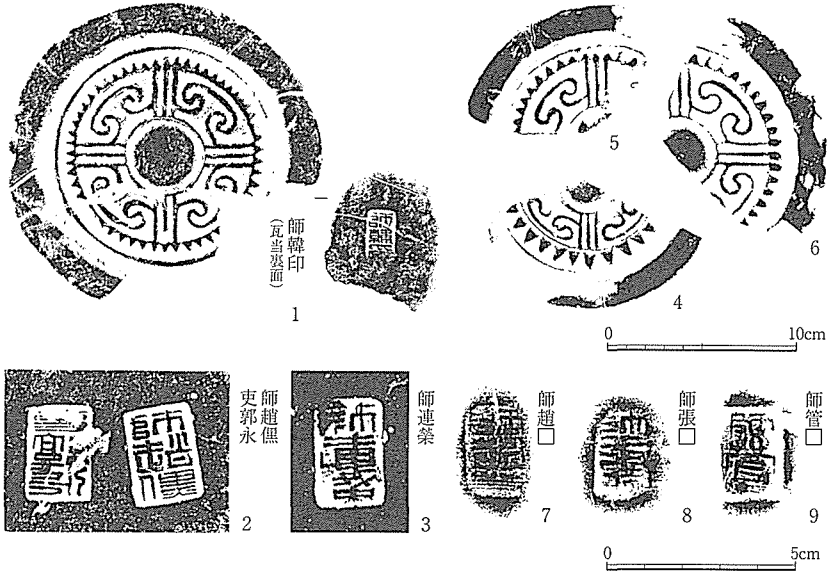


図5　曹魏洛陽城の「吏」「師」印瓦と雲紋瓦当
1. 太学　2. 洛陽宮城内　3・4 金墉城　5～9 閶闔門

北魏宮城門の下層にそれよりふるい基壇が存在することが明らかになった〔銭国祥・肖淮雁ほか二〇一〇〕。二号門は閶闔門の北およそ九五メートルの位置にあり、闕をもたない点をのぞけば閶闔門とほぼ同じ規模で、構造も近似している。東西四四・五×南北二四メートルの基壇上に七間×四間の門楼を築き、版築の隔壁によって三つの門道をつくり、基壇の南と北には門道と対応する位置にそれぞれスロープがとりつく。閶闔門と同様に、造営・使用時期は三段階に大別でき、魏晋代にはすでに北魏の宮門とほぼ同じ規模の門が存在し（第一期）、北魏はその基壇を利用して宮門を再建（第二期）、北周の時代になって北魏の宮門を改修して使用した（第三期）と考えられた。

さらに二〇〇九年には、二号門の北およそ八〇メートルに所在する三号建築址の発掘調査が、同じく日中共同で実施された。三号建築址は、太極殿の前面に形成された院落の最前面に位置する重要な建物である。閶闔門と二号門の背後に位置する建築でありながら、その構造は大きく異なっている。東西三六・四×南北九メートルの長方形基壇上に、東西に長い桁行一三間の建物があり、中央九間は梁行三間、両側各二間は梁行一間となっている。東西両端には小さな門があって、西の門は附属建築へと通じている。これらの建築遺構の中心年代が北魏の段階にあることはまちがいなく、北周のころに部分的な改変をうけているらしい。北魏よりふるい遺構の存在についてはまだ充分に究明されていないものの、部分的な断ち割り調査によって版築基壇が魏晋代までさかのぼる可能性が指摘されている〔銭国祥・郭暁濤ほか二〇一〇〕。

二号門と三号建築址の下層遺構については、なお未解明の部分が少なくない。しかし一連の調査によって、北魏の閶闔門から太極殿へとつらなる大型建築群のうち、少なくとも一部の主要な建築群の創建は魏晋代にさかのぼることが解明された。とりわけ、閶闔門とその北側の二号門については、北魏の宮城門とほぼ同じ規模の基壇が魏晋のときすでに存在したことがわかっている。北魏宮城内のいくつかの殿舎が、魏晋代の規模と配置をそのまま踏襲していたことは明らかである。

（2）閶闔門下層遺構の年代

近年の発掘調査は、曹魏洛陽宮城の研究を大きく進展させた。しかし、それに関連して、ひとつ解決しておかなければならない問題がある。漢魏洛陽城にかかわる従前の発掘調査報告では、出土した遺物や遺構の特徴によって、その年代を後漢・魏晋・北魏・北周（北朝晩期）に区別してきた。しかし、文献に記された建物の造営年代と照合させるためには、さらに厳密な遺物編年の

構築が不可欠である。たとえ発掘調査によって、北魏宮城門の下層から「魏晋」の門の基壇が検出されたとしても、その創建時期が、はたして魏なのか晋なのか、判断できないからである。

たとえば佐川英治〔二〇一〇〕は、魏晋の間に太極殿の所在になんらかの改変があった、つまり後漢南宮の地から北宮の地へと移された可能性があると指摘する。文献の記録では魏と晋の間に洛陽宮城の大きな変革を想定することができないとはいえ、考古学の方法論のみでその当否を明確にすることはできない。従前の考古学的年代の精度では、閶闔門下層の門闕基壇が晋の創建だと考えても、発掘調査成果と矛盾することはないからである。

しかし、私見によれば、北魏閶闔門の下層から検出された魏晋の門闕基壇は、まぎれもなく曹魏の創建にかかるものである。閶闔門址の発掘調査では、外区に鋸歯紋をめぐらせた雲紋瓦当がいくつか出土している（図5―5・6）。銭国祥〔一九九六〕はこの種の雲紋瓦当を魏晋代に位置づける。閶闔門の例と酷似した雲紋瓦当は、洛陽城北西隅の金墉城址（図5―4）および南郊の太学址（図5―1）から出土し、これらが同時期に造営されたことは明白である。注意したいのは、太学址の瓦当は裏面に「師韓印」のスタンプが押捺されていることで、閶闔門や金墉城からも、先の雲紋瓦当にともなって、「吏某」「師某」のスタンプを押捺した瓦（図5―3・7～9）が出土している。

前稿〔向井二〇一〇〕で考証したように、「吏」は製作を監督する役人を意味し、「師」は瓦を製作した工人をさす。その年代は、瓦の製作技法から魏晋代であることは明らかで、西晋代には司馬師（景帝）の諱である「師」字を避けていたことから、「師」印は曹魏のものである可能性がたかい。「吏」「師」の呼称が曹魏の紀年銘弩機に多用されていることも、その推定を裏づける。「吏」印と「師」印とが同一個体に押捺された例（図5―2）があることから、両者が同時期に使用されていたことに疑問の余地はない。これらの文字瓦を出土する金墉城①や太学址②は、いずれも曹魏文帝あるいは明帝の時代に造営されたものである。

曹魏の文字瓦である「吏」「師」印の瓦が閶闔門の発掘調査で複数出土したという事実は、北魏閶闔門の下層で発見された門闕基壇が曹魏の創建であることを意味している。もちろん、そのことだけを根拠に、下層の門闕基壇を曹魏の閶闔門と断定することはできない。しかし、先にみたように、先代の文帝のときに完成していた施設の多くは北魏宮城の北半とその北方に分布し、宮城南半はまだ整備されていなかったのであるから、宮城南半の建築群は、明帝以後の造営と考えるのが妥当である。そうすると、北魏閶闔門と同等の規模をそなえた曹魏の宮城門にふさわしいのは、

明帝が造営した閶闔門をおいてほかにないのである。

(3) 後漢北宮と曹魏南宮との関係

曹魏の閶闔門が北魏の閶闔門と同じ場所にあったとすると、先にとりあげた曹植「毀鄄城故殿令」の「朱雀を夷らげ閶闔を樹て」たという文章はどのように理解すべきであろうか。少なくとも曹魏の門闕基壇の下層から後漢の門址は検出されていないから、後漢の朱雀門の場所にそのまま曹魏の閶闔門が建設されたのでないことは明らかである。朱雀門は、後漢北宮の南面にあった南掖門のことで、朱爵司馬が管掌していたことから朱爵南司馬門などと呼ばれた。[3] 銭国祥〔二〇〇三〕はこれを踏襲したのが魏の司馬門だと考える。『水経注』穀水注は次のようにいう。

> 渠水、銅駝街より東し、司馬門の南を逕る。魏の明帝始めて闕を築くに、崩れて数百人を圧殺し、遂に復たは築かず。故に闕なし。[4]

閶闔門から南へのびる大路が銅駝街で、司馬門はそれより東に位置していた。後漢北宮の正門である朱雀門を継承して、明帝は司馬門に闕を築こうとしたが、崩落事故のためその造営を断念した。それにかわって、西側に新たに建設された宮城正門こそが閶闔門だったのではないかと銭国祥は推定する。

曹魏明帝による司馬門造営の記事は『水経注』にみえるのみで、銭国祥説を他の史料から裏づけることは困難である。しかし、明帝が本格的な宮室修治に着手する前に、洛陽宮の造営計画になんらかの変更があったと仮定すると、諸書の記載から生じたいくつかの矛盾が解消される。たとえば曹植「毀鄄城故殿令」では「徳陽を平らげ泰極を建つ」と述べているにもかかわらず、後漢の徳陽殿の地に太極殿を造営したとする史料はほかになく、『魏志』裴松之注や『水経注』では崇徳殿の場所にあったという。既述のように、曹植の文章は文帝の時代のもので、明帝の太極殿造営より前に曹植は没している。これは、文帝のときすでに、太極殿と閶闔門の造営計画がかたまり、その候補地として後漢の徳陽殿と朱雀門が選ばれ、工事に着手していたことをしめしていると考えられる〔安田二〇〇六〕。しかし、『魏志』裴松之注や『水経注』によれば、明帝が実際に太極殿を建設したのは、徳陽殿ではなく崇徳殿の地であり、また発掘調査によって閶闔門は後漢代に宮城門が存在しなかったところに新たに建造されたことも判明した。つまり、太極殿と閶闔門の造営計画は、文帝のときに策定され、明帝のときに変更された可能性がある。

先にみたように、後漢北宮の徳陽殿と崇徳殿の位置関係について、「東京賦」の薛綜注が「崇徳は東に在り、徳陽は西に在り」

というのに対し、徳陽殿が東に、崇徳殿が西にあったことを示唆する史料も存在する。⑤実際には後者が正しく、崇徳殿の東に徳陽殿があり、また朱雀門は徳陽殿の南にあったのではないだろうか。蔡質『漢儀』によれば、とおく偃師からも洛陽の朱雀闕と徳陽殿をのぞむことができ、その上は鬱律として天につらなるがごとくであったという。⑥朱雀門と徳陽殿は後漢の明帝が造営した北宮の正門と正殿であり、洛陽を代表する建造物であった。それらが南北に主軸をそろえていたかどうかは明らかでないものの、朱雀門の奥に徳陽殿があったはずである。曹魏文帝は当初そこに閶闔門と太極殿を造営しようと計画していたのを、明帝のときになって計画を変更し、主軸を西側にずらして崇徳殿の場所に太極殿を築き、その南面に新たに閶闔門を造営したのであろう。つまり、曹植「毀鄄城故殿令」は文帝から明帝初期における造営途中の計画を述べたもので、『魏志』裴松之注や『水経注』は実際に造営された結果をいったものということができる。

もっとも、司馬門における闕の崩壊が、宮城の造営計画を変更する直接的な契機となったとしても、そのことだけが原因で主軸を西側に移したとは考えにくい。外村中〔二〇一〇〕は、曹魏の鄴や南朝の建康をはじめ、魏晋南北朝の都城では宮城の西の区画に主要宮殿群が整列し、東の区画に朝堂が集中して、ふたつの軸を形成していたことに注目する。つまり、曹魏洛陽の宮城においては、西側の主要宮殿区の前面に閶闔門が置かれ、東側の朝堂院の正門としての役割を司馬門がになっていた可能性が考えられる。洛陽の宮城がこうした二軸制を採用したことと、司馬門の闕の崩壊、明帝による洛陽造営計画の変更といった出来事がどのようにかかわっているのか、今後さらなる検討が必要である。

① 『水經注』穀水注に「穀水又東、逕金墉城北。魏明帝于洛陽城西北角築之、謂之金墉城。魏文帝起層樓于東北隅」といい、明帝が金墉城を建設する以前に、その地には文帝が百尺楼を築いていた。百尺楼について『元河南志』魏城闕宮殿古蹟條に「百尺楼。（陸機）洛陽記曰、洛陽城内西北隅有百尺楼、文帝造」という。

② 『魏志』文帝紀に「（黄初五年）夏四月、立太學」という。

③ 『續漢書』百官志二に「北宮朱爵司馬、主南掖門」といい、注に『古今注』を引いて「永平二年十一月、初作北宮朱爵南司馬門」という。ほかに「朱雀門」「朱爵門」「朱雀闕」「朱爵闕」「朱雀掖門」などと呼称された。

④ 『水經注』穀水注「渠水自銅駝街東、逕司馬門南。魏明帝始築闕、崩、壓殺數百人、遂不復築。故無闕」。

⑤ 前章注⑬参照。

⑥ 『續漢書』禮儀志中の劉昭注に引く蔡質『漢儀』に「自到偃師、去宮四十三里、望朱雀五闕、德陽、其上鬱律與天連」という。

おわりに

近年における考古学的調査の成果は、曹魏洛陽城の研究を大きく進展させた。それにともない、文献史料を再検討して洛陽宮城の新たな復元案を提示しようとする試みもさかんになってきた。本稿は、そうした近年の研究の論点を整理するとともに、考古資料と文献史料の検討をつうじて、曹魏の時代に造営された洛陽宮城の構造について、展望を述べた。

従来、曹魏洛陽城の構造について、大きく二種の復元案があった。第一は曹魏の南北宮は後漢の南北宮をほぼそのまま踏襲したとする説、第二は曹魏の南宮と北宮はともに後漢北宮の地にあり、それがそのまま西晋・北魏に継承されたとする説である。これまでの文献史学的・考古学的研究の論点をあらためて整理し、第二の説が妥当であるとの結論を導いた。そして、議論のあった太極殿の所在について、曹植「毀鄴城故殿令」などの史料を根拠に、当初の計画では後漢北宮の徳陽殿の位置に太極殿を造営する予定であったのが、曹魏明帝のときに計画を変更して北宮の崇徳殿の場所に造営されたと推定した。

魏晋南北朝の都城制度を通時的にとらえたとき、曹魏の鄴城に宮城はひとつしかなく、魏晋洛陽城の影響をうけた東晋・南朝建康城でも宮城は単一であることを考えると、魏晋洛陽城において後漢代のようにふたつの宮城が併存したとするよりも、その宮城は単一であったと考えたほうが、当該期の都城の変遷をスムーズに理解できる。近年、五胡十六国の夏の赫連勃勃が都した統万城について赤外線航空写真と現地踏査成果をもとに新たな復元案が発表され、やはり単一の宮城をもつ都城であった可能性が指摘されている〔鄧輝ほか二〇〇三〕。これまでに明らかにされた魏晋南北朝都城のほとんどは、単一の宮城が都城の後方にかたよって配置されており、それらの制度にもっとも大きな影響力をおよぼしたであろう魏晋洛陽城のみにふたつの宮城があったとは考えにくい。やはり漢魏洛陽城では、曹魏のときに構造上の大きな変化があったと考えたい。

もっとも、いま漢魏洛陽城で進められている宮城中枢部の発掘調査が進展し、さらに多くの考古学的知見が蓄積されたとしても、曹魏洛陽城の構造をめぐる問題は容易には決着しないであろう。後漢南宮の宮殿や城門の遺構を特定し、それらを曹魏が踏襲したのか、あるいは放棄したのかを判別することができれば、曹魏洛陽の南宮と北宮をめぐる問題は、だれもが納得するかたちで解決するはずである。しかし、その道程はまだとおい。それに、曹魏洛陽城について解決すべき課題は、宮城の構造だけではない。本

稿では、大筋において銭国祥や外村中の復元案にしたがったけれども、それぞれの案は細部に食いちがいがあり、もう一度もとの史料にたちかえって検討をかさねていく必要がある。曹魏だけでなく、後漢・西晋・北魏の洛陽城についても、議論すべき課題は少なからずある。また本稿では言及しなかった、都城周辺の環境や景観をふくめた都市空間の分析〔塩沢二〇一〇〕も、より本格的かつ学際的な調査研究の進展が期待される。のこされた課題は多いが、本稿によって曹魏洛陽城をめぐる議論を少しでも深めることができれば、所期の目的は達せられたことになる。

参考文献

王　仲殊　一九八二「中国古代都城概説」『考古』第五期

郭　湖生　一九九一「魏晋南北朝至隋唐宮室制度沿革」山田慶兒・田中淡編『中国古代科学史論』続篇　京都大学人文科学研究所

佐川英治　二〇一〇「曹魏太極殿の所在について」『六朝・唐代の知識人と洛陽文化』岡山大学文学部プロジェクト研究報告書一五号

塩沢裕仁　二〇一〇『千年帝都洛陽――その遺跡と人文・自然環境――』雄山閣

銭　国祥　一九九六「漢魏洛陽城出土瓦当的分期与研究」『考古』第一〇期

銭　国祥　二〇〇二「漢魏洛陽故城沿革与形制演変初探」中国社会科学院考古研究所編『二一世紀中国考古学与世界考古学』中国社会科学出版社

銭　国祥　二〇〇三「由閶闔門談漢魏洛陽城宮城形制」『考古』第七期

銭　国祥・郭　暁濤・肖　淮雁・劉　濤　二〇一〇「河南洛陽漢魏故城北魏宮城三号建築遺址」『中国考古新発現　年度記録二〇〇九』中国文物報社

銭　国祥・肖　淮雁・劉　濤・郭　暁濤　二〇一〇「洛陽漢魏故城北魏宮城二号建築遺址発掘」国家文物局主編『二〇〇九中国重要考古発現』文物出版社

外村　中　二〇一〇「魏晋洛陽都城制度攷」『人文学報』第九九号

段　鵬瑚　二〇〇九『漢魏洛陽故城』文物出版社

中国科学院考古研究所洛陽工作隊　一九七三「漢魏洛陽城初歩勘査」『考古』第四期

中国科学院考古研究所洛陽工作隊　一九七三「漢魏洛陽城一号房址和出土的瓦文」『考古』第四期

中国社会科学院考古研究所　二〇一〇『漢魏洛陽故城南郊礼制建築遺址』文物出版社

中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所聯合考古隊　二〇〇九「河南洛陽市漢魏故城新発現北魏宮城二号建築遺址」『考古』第五期

中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所聯合考古隊　二〇一〇「河南洛陽市漢魏故城発現北魏宮城三号建築遺址」『考古』第六期

中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊　一九九九「漢魏洛陽故城金墉城址発掘簡報」『考古』第三期

中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊　二〇〇三「河南洛陽漢魏故城北魏宮城閶闔門遺址」『考古』第七期

張　鳴華　二〇〇四「東漢南宮考」『中国史研究』第二期

陳　寅恪　一九四六『隋唐制度淵源略論稿』上海商務印書館

杜　金鵬・銭　国祥主編　二〇〇七『漢魏洛陽城遺址研究』科学出版社

鄧　輝・夏　正楷・王　琫瑜　二〇〇三「利用彩紅外航空影像対統万城的再研究」『考古』第一期
那波利貞　一九三一「支那首都計画史上より考察したる唐の長安城」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』弘文堂
馬　先醒　一九八〇「後漢京師南北東宮之位置与其門闕」『中国古代城市論集』簡牘学会
向井佑介　二〇一〇「魏の洛陽城建設と文字瓦」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室
村田治郎　一九五一「前殿の意味」『日本建築学会研究報告』一六
村元健一　二〇一〇「後漢雒陽城の南宮と北宮の役割について」『大阪歴史博物館研究紀要』第八号
安田二郎　二〇〇六「曹魏明帝の『宮室修治』をめぐって」『東方学』第一一一輯
楊　寛（西嶋定生監訳・尾形勇・高木智見共訳）一九八七『中国都城の起源と発展』学生社
吉田　歓　二〇〇〇「漢魏宮城中枢部の展開」『古代文化』第五二巻第四号
洛陽市文物局・洛陽白馬寺漢魏故城文物保管所編　二〇〇〇『漢魏洛陽故城研究』科学出版社
渡辺信一郎　二〇〇〇「宮闕と園林――三～六世紀中国における皇帝権力の空間構成――」『考古学研究』第四七巻第二号
渡邉将智　二〇一〇「後漢洛陽城における皇帝・諸官の政治空間」『史学雑誌』第一一九編第一二号
Bielenstein, Hans. 1976. Lo-yang in Later Han Times. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 48.

図版出典

図1―1　王仲殊一九八二：図二より製図
図1―2　銭国祥二〇〇三：図一より製図
図1―3　馬先醒一九八〇：附図四より製図
図1―4　張鳴華二〇〇四：図二より製図
図2　銭国祥二〇〇三：図二・図三より製図
図3　中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊二〇〇三：図一より製図
図4　中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊二〇〇三：図四より製図
図5―1　中国社会科学院考古研究所二〇一〇：図二〇三
図5―2　中国科学院考古研究所洛陽工作隊一九七三：図八
図5―3・4　中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊一九九九：図一二
図5―5～9　中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊二〇〇三：図九・図一三

（京都大学人文科学研究所助教）